談話分析に基づく交流会話の中の聞き手の修復
インド人と日本人の ELF 使用場面

重光　由加[*1]

A discourse analytical study of other initiated repair in Small Talk in ELF: Between Indian participants and Japanese participants

Yuka Shigemitsu[*1]

This discourse analytical study focuses on ELF (English as a lingua franca) interactions in intercultural setting to see how the participants from different background actually act in ELF interactions.　The data used is the videotaped conversation data of six groups between Japanese and Indians where ELF is used in social conversation. All of the data are the first meeting conversations. The Japanese participants work in Japanese companies in India. They were transferred from their headquarters in Japan. Indian business people work in Japanese companies or have experiences working with Japanese business people. All of the data were recorded in Bangalore, India. The total length of the data is about three hours. As for their L1 (fist language), the Japanese participants' L1 is Japanese. Indian participants' L1 varies, such as Kannada, Telugu, Tamil, Marathi and Malayalam. Although Indian participants' language and socio-cultural background varies, they seem to be accustomed to ELF situations among themselves. They know that they have vocabulary differences and grammar difference according to the person in their ordinary interactions in English. However, for Japanese participants, they are often confused because they face English which sometimes does not conform to the norms of Inner Circle English which were taught at school before coming to India. The research questions are: 1) what is difficult for each participant? and 2) how they overcome the difficulty?　The discourse analysis of the first-time meeting shows repair questions are used effectively. It is found that Indian people converged on Japanese whose turns were very short. Both Japanese and Indian people always check what the other participants are saying. Doing so, both Japanese people and Indian people put priority in maintaining social relationships as well as communicative effectiveness than the correct forms of English. The data analysis also indicates length of overseas experience of Japanese participants. The study also compares the participants whose overseas experience are long (more than 10 years) and whose experience are short (less than 3 years). Participants whose experience is long shows more advanced intercultural skills for dealing with discourse pattern differences.

1 はじめに

日常の会話では、社会の一員として参加している会話参与者が、相手に伝わるためにふさわしい表現や伝わりやすい表現を選ぶ。また、一貫性のある表現方法でコミュニケーションを行うことが理想である。しかし、実際の会話には頻繁に発話産出、聞き取り、理解に障害が多く観察される。本研究では、ELF の異文化接触場面での交流会話でのインタラクションの中において修復が必要な場面で、会話参与者はどのようなやりとりを行い、また、修復をしていくかを談話分析の枠組みを用いた質的分析を行う。具体的には、人間同士の会話の中で、話し手の伝えようとしていることが理解できないとき、情報の受け手である聞き手はどのような言語行動をとるのか、すなわち、理解の試みはどのように観察されるのかについて、５つの会話をケース・スタディとして談話分析的アプローチの質的分析を行う。研究の専門的な意義としては、交流会話のインタラクションはどのようになされているかという語用論的解明である。また、研究の社会的意義としては、英語を母語としない国へ日系企が進出していくなかで、必要な言語能力の解明である。

*1 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授
2019 年 3 月 25 日 受理

本研究で分析に使用する会話データは、日本人とインド人による英語会話である。日本人はよくインド人の英語は聞き取りにくいと言うが、複数のインド人から日本人の英語が聞き取りにくいという指摘があるまた、日本人はインド人の英語について、日本の学校で学習した英語とは異なるという印象があるという報告もある（重光、2018）。そのようなわかりにくさがあるとするならば、インド人と日本人の ELF の接触会話では、意味の確認をするやりとりが多く見られ、修復現象を見るのに有効な会話データになると考えられる。

2 研究の背景

本研究は三つの学問的分野を基盤としている。ひとつは、ELF(English as a Lingua Franca) 研究であることである。ELF 研究とは、第一言語が異なり共通の言語を持たない者同士がコミュニケーションの言語として英語を選択する現象を分析する学問であると Seidlhofer(2011)によって定義されている。ELF は、ENL 研究(English as a native language)と異なる主な点は、コミュニケーションの公立かが優先されること、行動規範の異なる異文化間コミュニケーションの接触場面でもちいられることである。本研究のデータは、日本語母語話者とインド人の英語による会話である。正確に言うと、インド人の母語は英語ではないので、英語は ESL(English as a second language)として使用している。インドの憲法で定められている連邦公用語はヒンズー語で、準公用語は英語であるが、ヒンズー語の母語話者はインドの人口の 18%程度しかない(2018 年現在)。また、インド全域では 22 種類の言語が州ごとに公用語として指定されている [1]。したがって、英語はインド人同士のリンガフランカとして用いられている。重光(2018)によれば、インド人はお互いが文法や単語やスラングが異なる英語を使っているという認識がある [2]。

ふたつ目の基盤は、会話分析の修復の機能である。これは、会話の中に頻繁に起こる発話産出・聞き取り・理解にかかわる問題に対する対処(Schegloff, Jefferson & Sacks 1977)の方法である。会話の修復は、言い換え、言い直しなどの自己修復と聞き返しや質問による他者修復がある。本研究は、聞き手による修復に焦点を当てているので、他社修復の研究である。

三つめは、研究対象を交流会話に限定していることである。2010 年以降、雑談、スモールトークと言われる会話のジャンルを科学的に分析する論文が増えている。筒井（2012）、村田和代・井出里咲子編（2016）、清水（2017）らが、それぞれ、会話分析、談話分析、語学教育の面からから雑談の分析を試みている。雑談とは、清水(2017)によれば、テーマも決めず、いろいろな話題のたわいもない内容を気楽に話すことと定義されている。その特徴として、当事者の間にラポールを生み出すことによって、良好的な人間関係を育み、物事を円滑に運ばせるために行われることが多い。ラポールとは、信頼関係や心が通い合った状態を言う（清水、2017：17）。

一方、日本語教育の会話指導の面から、尾崎、椿、中井らは、他の話すことの行動（スピーキング行動）の中での、雑談、すなわち交流会話について図 1 のような分類を行っている。

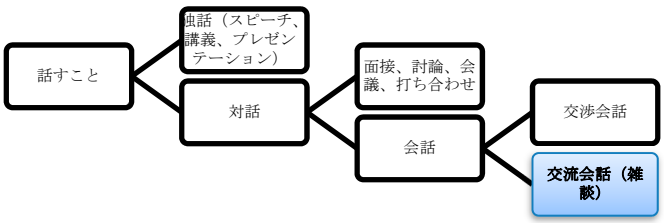

図 1　尾崎、椿、中井（2010）の「話すこと」の分類

この図が示すように、雑談話特に目的がない「会話」一部であるが、交渉会話（時間を尋ねるなど）が持つ、情報収集などの目的をまったく持たない会話である。インタラクション能力とは、インタラクション（＝ 相手とのやりとり）を通じて会話を円滑に回していく能力といえる。具体的には、話し相手と協力し合いながら、円滑、かつ、失礼ではないように会話や話題を開始し、進め、割り振り、終える事のできる能力であり、その中に会話の修復も位置づけられている。

本研究が分析する交流会話で予想される会話の修復に関しては、津田（2015）の聞き返しの機能の拡張が検討される必要がある。津田はイギリス、アメリカ、オーストラリア、日本の母語話者同士の交流会話の中の聞き返しを分析した。津田(2015)は、相手の言っていることがわからないときの聞き返しの機能には情報を得る機能だけではなく、対人関係機能も付随することを指摘している。

以上の先行研究からは、会話の中では話し手だけではなく、情報の受け手である聞き手の振る舞いにより会話が進行していることが示唆されている。本研究では、ELF の会話の中で、情報の受け手である聞き手が話し手の言っている内容が理解できないとき、正確な情報をどのようにして得ようとするのか、また、その際の談話の基本状態について質的な分析をする。

本研究のリサーチ・クエスチョンを以下の 3 点に設定する。

RQ1:修復依頼は相手に正しく伝わっているか

RQ2:どのような配慮をともなった修復依頼がなされているか

RQ3:協力し合って行われているか

3 分析対象データと分析方法

使用するデータは日本人とインド人の英語による初対面接触会話（表 1）のうち 5 つを使う。会話はすべて 2017 年 8 月にインドの B 市で収録されたものである。ま

た、I8 を除いてはすべて男性である。会話のジャンルは尾崎ら(2010)のスピーキングの分類の交流会話に相当する。各会話は 30 分行われ、録画・録音された後、トランスクライブされた。会話参与者は、全員研究協力への同意書を提出している。同意書の中に、表現の文法ミスや表現の間違いは研究では指摘しないという項目があるので、本研究ではそれについては詳細な指摘はしない。

表１．使用した会話データ

会話番号	会話参与者コード			
I83	J52	I1	---	---
IE85	J50	J51	I4	I5
IE86	J50	J51	I1	I3
IE87	J50	I1	--	--
I92	J3	J55	I3	I8

J の記号のつく参与者は日本語である。I の記号のつく参与者はインド人である。インド人参与者の母語は、I1 は Telugu 語、I3,、I4、 I5 は Tamil 語、I8 は Malayalam である [3)]。J50, J51 はインドと日本の共同経営の会社および日本企業に勤めており、J55 以外は、初めての海外赴任である。J52 と I4, I8 は女性で、それ以外は男性である。参与者の年齢は 30 代から 50 代である。

4 分析と考察

会話データの中から特に参与者の意味の理解が困難であった部分を抜粋して分析する。本研究は。

(1)の抜粋は、IE86 の会話は情報発信者が I3 で情報の受け手は J50, J51 と I1 である。I1 は I3 の発話内容に関しては何も発言していない。日本人 2 人とインド人 2 人が英語で会話をしている。日本人がインドでも映画館で映画を見たことがあること、ネットを利用して日本のドラマや映画を見ていることを述べていると、I3 が 07 行目で割り込むように最近『好きだ､』(注 4)をインドで見たという話題を出す。しかし、唐突であったこと、I3 が単語単位の発話しかしていないこと、その映画が知名度の低いものであったため、日本人がわからず理解に問題が発生した。08 行目で J50 により Hmm↑が発せられる。これは、思いがけないことがおこったときの驚き(dismay)を表している (Maynard and Zimmerman, 1984). I3 からより詳細な説明がないため、10 行目から 21 行目は、単語レベルの繰り返しをしている。I3 からの情報はほとんどないし、I3 が習いたての日本語で説明を試みてかえって意味がわかりにくくなっているところもあるが(23 行目)、日本人参与者は「わからない」ということははっきりとは言わない。29 行目で、‘I can’t get understand’（ママ）と言ったあとも、上を向いて考えるポーズをしばらくとり、I3 の出した新しい話題を無視したわけではないことが示されている。ここで、選択されているポライトネス・ストラテジーはポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであり、相手の言っていることが理解できないことがあっても、相互でいっしょに考えようという態度をとり、ラポールを保つ配慮がなされている。何度も繰り返して確認する「相互ひきこみ発話」から、意味を理解してもらえず話題も深まらなかった I3 のポジティブ・フェイスも保たれており、少なくとも I3, J50, J51 の 3 人の間にはラポールが築かれている。

(1) [IE86](11:53-13:07)
01 I3 : So normally which kind of videos you watch?
02 Like?
03 J50: Uh, sometimes an an animation and
04 variety comedy and also drama and cinema
05 and in Japanese.
06 I1: In Japan that [geeky].
07 I3: **[Su-ki-da]**←トラブルソース
08 J50: Hmm↑
09 I3: Su-ki-da, recent.
10 J50: What?
11 I3: Su-ki-da.
12 J50: Su-ki-da? What, what is [about]?
13 I3: [Movie]
14 J50: Movie?
15 J51: Movie?
16 J50: Su-ki-da? なんだ
17 I3: 2015, released.
18 J50: 2015, very, very latest.
19 I3: Older.
20 J50: スキダってなんだ
21 J51: スキダ。スキダ
22 J50: What what what kind of what kind of movie?
23 I3: ゲンコウサント ゲンコウニント law student
24 love – love story.←わかりにくい発音
25 J50: Hmm? Law story←聞き間違い
26 I3: It’s a [Japanese] love story.
27 J50: Law story law story. なんだ law story
28 I3: Su-ki-da.
29 J50: Su-ki-da, んーI can’t get understand えー
30 what movie is. @
31 J51: Oh. 上を向いて考える仕草 **[**この後、話題を変える**]**

(2)の抜粋は二人会話で、抜粋部分の情報発信者は日本人の J50, 情報の受け手としての聞き手はインド人の I1 である。J50 の英語は規範文法による Standard English からはかなり逸脱しており、聞き手である I1 は聞き直しやパラフレーズが繰り返し使われている。この抜粋部分より前は I1 がインドで古くから伝わる迷信について話していた。関連発話として、J50 が日本の「お清めの塩」の習慣にについて説明している。I1 は, 「話し手の発話の一部

の繰り返し」「質問」「パラフレーズ」「理解した部分を示す」というストラテジーを全体にわたって使い、相互ひきこみ発話をしながら、意味の確認と理解を試みている。「J50 が言い終わる前に先取で発話をしているところがある(05 行目、13 行目、17 行目, 29 行目、46 行目)。これにより、理解とラポールを示すことができている。J50 が伝えようとしている内容が、I1 に伝わっているとは言い難いが、相互ひきこみ発話は続けられ、ラポールは保たれている。

(2) [IE87](15:49-18:10)

01 J50: I I think one, one traditional is there in
02 Japanese also, uh, if when some someone
03 expired, like go to the ceremony to give and we
04 wear the black color…
05 I1: **Yes, yes, yes, yes.**
06 J50: Black colore's clothes and go to the ceremony
07 and say good bye and then come back before
08 eh, enter the house, we uh, put we put like
09 salt salt
10 I1: Ah oh really?
11 J50: Like to remove the not that is not dirty dirty
12 that is to clean our body and
13 I1: **With salt.**←先取発話
14 J50: No, no, only shoulder.
15 I1: Ah then you should…
16J50: Yes, yes, yes. Ah and go inside the house.
17 I1: **With the same clothes↓** ←先取発話
18 J50: Yes, yes, yes.
19 I1: With the same clothes↓
20 J50: And sometimes sometimes they put some the
21 amount of salt, small piece amount salt
22 I1: **Okay**←ここまで理解したことを示す
23 J50: in front of their house's door.
24 I1: **Okay**←ここまで理解したことを示す
25 J50: To be clean, not to enter the uh なんだろう
26 some ghost @@@ not to get
27 I1: Ah Every day, every day?←確認の質問
28 J50: No, no, no, no, after, after 1 week and so on.
29 **One week always put** ←トラブルソース
30 I1: Every week every week←先取発話
31 J50: No, no, no, only for 1 week keep, approximate
32 approximate.
33 I1: Ah only for one week means, like uh, when…
34 J50: After the ceremony.
35 I1: **After the ceremony**.←繰り返しによる確認
36 J50: After the ceremony.
37 I1: **If someone dies in our family**←パラフレーズ
38 J50: Yes, yes, yes uh.
39 I1: **So, we put salt.** ←パラフレーズ
40 J50: Salt one, one, one amount.
41 I1: **So if from my family if someone dies, I put**
42 **some salt and some other for uh, like some**
43 **force should not come**←パラフレーズ
44 J50: No, no, no, no, no, not someone should not
45 come, only, only put
46 I1: **Salt.** ←先取発話
47 J50: Salt.
48 I1: Who will put the salt?←関連ある質問
49 J50: Ah. えー In the family person, close one
50 wife is also okay. あー One part of the family
51 put the salt.
52 I1: **Put the salt.**←繰り返しにより理解を示す
53 J50: And they keep.
54 I1: **They will keep for for 1 week.**←前発話修正
55 J50: Because uh, so hence あーour we can
56 understand ah that family someone died.
57 I1: Ahh.
58 J50: We can.
59 I1: **We can see oh if, if I am a visitor, if I see the**
60 **salt, oh someone died in this**
61 J50: Ah yes, yes.
62 I1: Home like that, we say. Ah.
63 J50: Idea, you know, this is one.
64 I1: **So that's why when we enter there and we wish**
65 **some you know, あーwish something and then**
66 **we come back and we put salt and we remove**.
67 J50: Ah yes, yes.
68 I1: **Is it?**←I1 のパラフレーズの正誤の確認
69 J50: But in the ceremony only once only one time.
70 I1: **Only one time.**←繰り返しにより理解を示す
71 J50: Uh.
72 I1: After the ceremony if I went some other's family
73 place, I went there.
74 J50: No, no, no, no, not for home not for not for
（中略）
87 I1: **That's why I, I went to someone ceremony, so**
88 **when I return back I am removing that bad**
89 **things, okay, I am clean.**
90 J50: Yes, yes, yes. And they enter the house.
←I8 によるパラフレーズが間違っているのに、肯定
91 I1: Yes. I heard in *Obon*, *Obon*. 話題がかわる
92 J50 *Obon*, yes, yes, yes

(3)の例は、日本人の I55 が、B 市に赴任してから、通勤の車の中で読書したりスマートホンを見ていたため、視力が下がってしまい、オーディオブックを聞くことにしたと 01 行目から 13 行目にジョークを交えながら話しているところである（インドでは、安全のため運転手付きの車で通勤をすることが多い）。そこへ、I3 が J55 の視力を尋ねている（15 行目から 21 行目）。ところが、一般的な視力の示し方が、日本とインドと異なっているようで、I3 の言った

「パーセント」「目のレベル」が何を尋ねているかわからず、J55 が困っている。そこへ、I8 が「視力(eyesight)」を訪ねていると発話を挟む。また、インドではパーセントで表示をすることも付け加えられている。日本と方式が異なるので、どのように説明してよいか J55 が悩んでいる。悩んでいる様子は、degree を日本語として発音し、自分の発話が他者に向かっていないことが示されている（31 行目、33 行目）。そして、自分はその数値は知らないことを伝える。

ここまでで、インド人は視力の方式の説明を一切しないし、日本人からも日本は視力の示し方が異なることは、説明がなされていない。相手に踏み込まない配慮がなされている。視力の示し方についての違いの解明を試みることなく、J3 が車の免許は、車の免許の取得・書き換えには 0.6 か 0.7 が必要ということを述べ、J55 が J3 の視力を尋ねる話題が挿入されている。

(3) IE92 (4:53-5:55)

01 J55: So the – in these 3 months the – my eyesight
02 becomes very, very bad. So now the, uh I try
03 not to read anything in the car.
04 I3: I see.
05 I8: That's true.
06 J55: Thus maybe just listen to the some the
07 audiobooks…
08 J3: Ah.
09 J55: kind of thing yeah.
10 I8: Yeah.
11 J55: So the – need to keep my eyes – I need to still
12 use my eyes for another 40 years or something
13 so…
14 I8 @@@
15 I3 @@@. **What's your percent – point of level**
16 **eye**
17 J55: hm-huh
18 I3: **now – now the level of**
19 J55: hm-huh
20 I3: **eye you can see what's your normal or**
21 **abnormal or between 5 to 10?**
←トラブルソース
22 J55: Ah
23 I8: The eyesight.
24 J55: Eyesight.
25 I8: We count the percentage, [right]?
26 I3: Parimalraj [Count].
27 J3: You mean the←修復要求
28 I8: Power of your glass.
29 I3: Power of your glass. Degree.
30 J3: Ah.
31 J55: Ah. [ディグリー.]←考えていることを示す
32 I8: [Yeah.]
33 J55: [ディグリー] Uh I don't know those figures.
←自分が知らないことを伝える
34 J3: I think in Japanese if you – I mean you know
35 to get driver's license the minimum is [0.6 I]
36 suppose←自分の日本での体験を語る
37 J55: [0]. Yeah 6.
38 J3: Or 0.7. And…
39 J55: Yeah right.
40 J3: Yeah my eye is actually my capability to see
41 and capture [ph] is around 0.3 or something.
42 So my glass – I mean add some more
43 J55: Right, right, right, right.
44 J3: clear. ←J55 の考えをサポート
45 J55: So you are 0.3 [without glasses].
46 J3: [Yes]. Yes, yes.
47 J55 Yeah. Okay th – that's very good.
48 J3: [Yes I]…

(3)の抜粋では、結局トラブルソースとなった I3 の質問には答えることなく、また、日本人側が視力の示し方の方式が異なるからわからないことをほのめかしているにもかかわらず、インド人側がそれを理解できていない、または、踏み込んでいない様子がみられる。視力の話題はこの抜粋のあともしばらく続くが、I3 の質問の答えは出ないのである。ここでは、ラポートを優先し、雑談としてのお互いの視力の自己開示は無視されたと言えよう。

(4)では、抜粋を読んでわかるように、J51 の英語表現の文法間違いが多い。また、発音もインド人にとっては明瞭ではないようである。02 行目の ship がおそらく不明瞭であったため、I4 にとっては sea と聞こえたようである。したがって、03 行目で簡単な聞き返しの方策を利用している。J51 による修正は、直後で起きている。製品の輸送に関して、チェンナイを使わなければならないことを J51 は 01 行目から 04 行目にかけて伝えている。04 行目の表現も不明瞭な表現「チェンナイで使う」を使っているため、05 行目で I5 は無視したが、I4 が表現の修正を行っている。ここでは、J55 がどの程度チェンナイの港について詳しいかはわからない。しかし、09 行目で、おそらくこの会話の機会がチェンナイ出身の参与者と話せたため、チェンナイの貿易港について知るチャンスだと言いたいのだろうが、表現に不明瞭さがありうまく伝わらない。12 行目で、チェンナイの港について具体的に尋ねようと思っているが、ここもまた表現に不明瞭さがあり、インド人参与者に誤解を与えていることが、インド人参与者の発話からわかる。インド人参与者は、港ではなくマリーナ（海岸）については言及する。チェンナイのマリーナ（海岸）は世界で二番目に大きい話が出される（15 行目、16 行目）。それに対して、J51 は驚きを述べているだけで、会社の製品輸送とそのための工場見学の話に戻せないでいる。

(4)IE85

01 J51: When – when I'd like – we tried to – uh –
02 dispatch our product by **[ship]**.
←トラブルソース
03 I4: [Sea]?←聞き間違いのための確認
04 J51: Ship, we have to use in **Chennai.** ←修正
05 I5: Okay.
06 I4: Chennai port.←修正
07 J51: Chennai port.←確認
08 I4: Chennai port, okay.←確認
09 J51: It is very chance to visit Chennai @@@ to know
10 about lot – about our logistic route. @@@
11 I4: Yes.
12 J51: **How is Chennai port is there.**
←トラブルソース
13 I5: Actually it is – uh – **Chennai beach, Marina**
14 each is the second-largest beach in the world.
15 I4: Chennai **[beach].**←トラブルソース
16 I5: **[Beach], Marina.**
17 J51: Beach?
18 I5: Marina beach is there. It's a **second-largest**
19 beach.
20 J51: Second [largest]?
21 I5: [In the world], yes.

(5)では、会社グループチーフである I1 が、他の人がきちんと仕事をやっているかどうかに関して、チーフはフォローが必要であることを述べているところである。07 行目は、聞き逃しである。これを、会話を中断することなく、聞き取れなかったところだけ J52 は疑問詞を使って聞いているところが観察されている。また、10 行目で先取発話が観察され、11 行目では、説明が付加されている。これより、会話の流れを乱すことなく、聞き返したいところだけ的確に確認することで、会話のラポールが持続している。

(5)IE83

01 J52: So, as a leader, how you manage everyone's
02 schedule?
03 I1: Ah, you have to followup.
04 J52: Followup? Okay, okay, okay. @@@
05 I1: But there are…
06 J52: Good job.←割り込みの語彙的あいづち
07 I1: Too much followup **also.**←トラブルソース
08 J52: Too much followup what?←確認の質問
09 I1: Too much followup also…
10 J52: [Not good].←先取発話
11 I1: [It] irritates the people in India.
12 J52: @@@

(6)の例は、仕事中に全体の作業の状態をどのように把握しているかを J53 が I1 に尋ねているところである。01 行目から 02 行目の、質問に対して、I1 はその疑問に同意していることを伝え(03 行目)、状況を説明する。ところが、J52 はその中に出てくる gas people という語句がなぜそこにでてきたかわからないため、聞き返しを行っているところである。聞き返しの応答が理解できたときは、理解したことを伝えている。

(6)IE83

01 J5: So, how you – how you obtain the definite
02 timeline from your [colleagues?]
03 I1: [Yes, yes.] It is really – @@@ – it's the same
04 situation it happens in our daily lives many
05 times, even if you call **gas people** or even if you
06 call. ←トラブルソース
07 J5: Gas people?←聞き返しによる確認
08 I1: [Example].← 確認の回答
09 J52: [Yeah, electrician], I understand. Yeah, yeah.
10 Please continue. ←理解したことを伝える

(7)の会話では、I3 の発話全体がトラブルソースである。この会話は、先に示したように 4 人の会話である。I1 が話始めると、I1 も口を挟まない。内容を見ると、チェンナイの大使館のそばのレストランの様子が、比較的速いスピードで言われている。具体的な話が、宗教・文化的な抽象的な話につながっていく。J50 と J51 はほとんど理解して聞いている様子はない。I1 も口を挟もうとしない。ここではラポールが崩れている様子が修復されている。J50 が聞こえた地名を復唱することで、理解していることの見せかけを行い、ラポールを保とうとしている。

(7) IE84

01 I3: **Yeah, if you come to Chennai na, there is an**
02 **Embassy, US Embassy. Backside of the**
03 **embassy, there is a vegetarian hotel, there**
04 **most of the – uh – US Embassy people used to**
05 **eat. The food would not be spicy but from**
06 **there if you go little other shop, there is one –**
07 **some restaurants are there. If you go there,**
08 **they prefer only – you know – that they made**
09 **some – they – there is the food culture**
10 **[Unclear] food, it's a region in own place,**
11 **there they always eat spicy food. So in – you**
12 **heard about that issue that they happened,**
13 **that – you know – some archaeological**
14 **things were going on in one place and**
15 **something like – named – nearby Shivaganga**
16 **– Shivaganga – one place in [Tamilnadu].**
←トラブルソース
17 J50: [Shivaganga Okay].
18 I3: There are some archaeological things are
19 going. The Government of India stopped it,

20　　but it has its roots of Tamil culture and Tamil
(つづく)

紙面の都合上、20 行目までしか抜粋を示さないが、このあとは、ほかの 3 人は口をまったくはさまない。会話のあとに I1 にフォローアップインタビューをしたところ、I3 の話に宗教への言及があったので、何もいわなかったとのことである。

5 まとめ

本研究では、日本人とインド人の ELF による初対面交流接触談話を分析し、聞き手が会話の修復をどのように行っているかを談話分析的アプローチにより分析した。列挙した抜粋に共通することとして、「わからない」ことを明白に述べていないことである。また、わからないことに関しての謝罪表現も出現していない。そのかわり、理解を促進するために、相互ひきこみ発話によりラポールを優先させながら、意味の解明を試みていることが観察された。

手法としては、復唱、先取発話、パラフレーズ、聞き返し疑問表現、関連する発話を述べるなどして、わからないことを相手に暗に伝えるという方法がとられている。これらは、ラポールを妨げない手法であると言える。

また、ラポールを修復しようという試みも見られた。会話の内容からラポールが築かれにくくなった場合に、あたかも会話に協力していることを示すのである。

宇佐美(2008)によれば、第二言語習得では、目標言語との談話的乖離がないことが望まれる。自然になされていることで、インドの談話と日本語の談話の類似性が示唆される。この点は、ENL の英語との比較を試みて、今後の課題としたい。

注

1)ヒンズー語と英語以外に、各州の公用語がある。インドには数千とも言われるさまざま言語変種があるが、各州の公用語としての地位を獲得したのは 22 言語である。

2)英語は準公用語であるが、Sindkhedkar(2012)によれば、英語が話せるのは総人口の 10%ほどしかいないと言われている。公立学校での英語の授業は中学からであり、十分に習得できない場合があることは想像できる。

3)テルグ語(తెలుగు)はアーンドラ・プラディッシュ州とテランガーナ州の公用語で話者は 8000 万人、タミル語(தமிழ்)はタミル・ナードゥ州の公用語で話者は 7400 万人である。これらは、お互いに意思疎通ができない言語である。

4)『好きだ、』は 2005 年の日本映画。石川寛脚本および監督。宮崎あおい主演。

謝辞　本研究の会話協力者および B 市日本人会のご協力に感謝申し上げる。

付記　本研究は、科研費基盤研究(C)課題番号 17K02903「南アジア・東南アジアにおける ELF 談話スタイルの実態調査：英語発信力に向けて」（研究代表者　重光由加）の研究成果の一部である。また、会話データは大学英語教育学会待遇表現研究会（代表　村田泰美）に属する(2019 年度より日英インタラクション研究会に名称変更を予定)。

参考文献

Dumouchel, P. (2017) *Living with Robots. Massachusetts.* Harvard University Press.

Maynard, D. W. and Zimmerman, D. H. (1984) “Topical talk, Ritual and the Social organization of relationship.” *Social Psychology Quarterly* Vol. 47(4). pp. 301-316.

村田和代・井出里咲子編（2016）『雑談の美学――言語研究からの再考』　ひつじ書房

尾崎明人・椿由紀子・中井陽子(2010)　関正昭・土岐哲・平高史也編『会話教材を作る』スリーエーネットワーク。

Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977) “The preference for self-correction in the organization of repair in conversation,” *Language*, 53(2) pp. 361-382.

Seidlhofer, B. (2011) *Understanding English as a Lingua Franca.* Oxford: Oxford University Press.

Seidlhofer, B. (2016) *ELF: English in a global context.* In Murata K. (ed). In Exploring Elf in Japanese Academic and Business Context.

重光由加 (2018) 「インドの言語環境と ELF 使用場面から見る英語コミュニケーション能力―インド人と日本人のビジネス・パーソンへの座談会から―」東京工芸大学工学部紀要人文社会編, 41(2), pp. 26-35.

清水崇文（2017）　『雑談の正体』　凡人社

Sindkhedkar, S. D. (2012). Objectives of teaching and learning English in India. In Journal of Arts, Science and Commerce. Vol. III. pp. 191-194.

津田早苗(2015) 「日・英語の他者修復―母語話者間会話と異文化会話比較」津田早苗他著『日・英語談話スタイルの対照研究：英語コミュニケーション研究への応用』ひつじ書房

筒井佐代　(2012) 『雑談の構造分析』　くろしお出版

植野貴志子(2018)「聞き手行動の「場の理論」による解釈：二社会話における相互ひきこみの発話とうなづき」村田和代編『聞き手行動のコミュニケーション』ひつじ書房　pp. 11-31.

宇佐美まゆみ「相互作用と学習―ディスコース・ポライトネス理論の観点から」西原鈴子・西部仁郎編『口座社会言語科学　第四巻　教育・学習』ひつじ書房　pp. 150-181.

Appendix

Transcribing symbols

@　　laughing

[　　]　indicating overlapping/simultaneous speech:

↓ falling intonation

? rising intonation